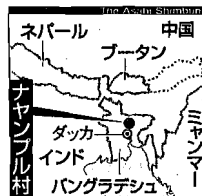




「センター」の集会で返済手続きをする女性たち
ナヤンフル村で、小暮亨

グラミン銀行10日にノーベル平和賞受賞

脱貧困女性を手助け



この日は家の貸賃業を始めるための融資の要望があった。「早速、発案者の家に行つて実現性を調べます」と支店の担当者、アラムさん(38)。

この日は家の貸賃業を始めるための融資の要望があった。「早速、発案者の家に行つて実現性を調べます」と支店の担当者、アラムさん(38)。

融資で起業、規模拡大

貧しい人向けの無担保少額融資を考案し、貧困からの脱却に貢献した功績でバングラデシュのグラミン(農村)銀行とムハマド・ユヌス総裁(66)が10日、ノーベル平和賞を受賞する。この融資はとくに家庭に閉じこめられてきた女性たちの自立の芽を花開かせてきた。活動を始めて今年で30年。現在、全国で670万人の借り手がいる。活動の中心は貧しい農村部といふ原点を守りつつ、新たな展開を模索する。

グラミン銀行 ユヌス氏らが76年、銀行が融資しない農村部の貧しい人々を対象に無担保で少額を貸し付け、自立のための起業を促す取り組みを始めた。83年にグラミン銀行を設立。22

平和賞受賞をどう受け止めていますか。私たちの活動は貧困をなくするためのものです。いわゆる過激主義は強い不正を感じた結果、生じます。経済的不公正もその一つです。不正を是正しようと、テロに訴



ムハマド・ユヌス総裁

た。借りた4千タカ(約6600円)で牛を買った。牛乳を売って返済する。融資の増額が認められ、コメや小麦の販売、次には養鶏を始めた。

融資額は昨年、10万タカ(約16万7千円)に増えた。養鶏の一方で雑貨店の経営を始めた。最近

1人6千タカ(約1万円)と額は少ないが、返済は1年が原則で、週単位。融資の翌週から返済が始まる。すぐに何か始めなければならぬ。

「2人ずつ融資し、4人が返済したら、残る1人が借りられる」「1人が返済できなかったら、他のメンバーも融資を受けられない」。こんな厳しルールを設けていた。借り手は当初、男女は半々だったが、今では97%が女性。女性の方が生活向上や子どもの将来を身近に考えるという。

話を使ってもらい、その利用料が収入になる。ナヤンフル村のサレハさん(42)が00年にテレホンレディーになると、毎日3000人が列を作った。3年前に年収40万タカ(約67万円)に達し、翌年に20万タカ(約33万円)の融資が認められた。小型バスを購入し、貸し切りバス業を始めた。テレホンレディーは全国で26万人。「当初は笑われました。携帯は都市部向け。村人は使い方もわからない」と。グラミンテレコムのカリド・シャムズ総裁は言う。今は農村部のインターネットカフェ設置に力を入れている。

「貸し携帯」も展開

携帯電話を農村の自立に役立てたい——同銀行系列の携帯電話会社グラミンフォンと、農村への普及をめざす非営利企業

01年には物ごいをするほど貧しい人を対象に新しい融資も始めた。7万7千人が利用する。使い道は起業に限らず、生活必需品に充ててもよい。自立の道も助言する。少額だが、無利子で返済期間も1年に限らない。

ナヤンフル村に近いサティアバリ村のアイエシヤさん(50代)は5年ほど前、3人の孫を養うため、半年前に出始めた。半年前、新融資で500タカ(約8300円)を借りた。紹介者の助言でパン工場の規格外品を安く値で買い、戸別訪問で売ると、1日30タカ(約50円)のうちに返した。「次の融資で衣料品工場の不良品を売る。それで物ごいをめたい」と話す。

ユヌス総裁インタビュー

経済的自立が不正だ

「活動で「盆栽」を例えに使っていますが。美しい人は盆栽だ」と言っています。高い木の種を植木鉢にまいても高く成長しません。種でなく、鉢植えという環境に境界があるのです。貧